



Title	アメリカ陸軍チャプレン科：軍隊における宗教サポート
Author(s)	石川, 明人
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 124, 1(右)-23(右)
Issue Date	2008-02-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/32426
Type	bulletin (article)
File Information	ISHIKAWA.pdf



[Instructions for use](#)

アメリカ陸軍チャブレン科

——軍隊における宗教サポート——

石川明人

アメリカ陸軍チャブレン科

——軍隊における宗教サポート——

石川 明 人

1、はじめに

「宗教」は一方では戦争に反対し、暴力のない平和な社会の実現に尽力する。しかし他方では武力行使を正当化し加勢することもある。かつてイエスは「敵を愛し迫害する者のために祈れ」「誰かがあなたの右の頬を打つなら左の頬をも向けよ」と言った。現代でもそれらの言葉にしたがって絶対平和主義と非暴力をつらぬくキリスト教徒や神学者は多い。しかしすでに四世紀にはアウグスティヌスがいわゆる「正当戦争」(Just War) について語っており、条件付きで武力行使を肯定する思想は一三世紀のトマス・アクィナスや一六世紀のマルチン・ルターにも見られる。二〇世紀以降もラインホルド・ニーバーやポール・ラムジーをはじめ、絶対平和主義に批判的な神学者は少なくない。¹キリス

ト教思想だけを見ても、戦争や軍事に対する態度は実に多様である。筆者の関心は、そうした神学的な戦争論に加え、「宗教」と「軍事」との具体的な交錯部分にある。例えば、軍隊という組織のなかで営まれる伝統的宗教や、軍事組織そのものもつ広義の宗教性、また戦場で人がどのように自らの信仰と向き合ったかという問題などである。本稿であつかう「従軍チャプレン」(military chaplain)とは、要するに軍隊に専属の聖職者であり、「宗教」と「軍事」とのもっとも具体的な接点のひとつとして挙げられるものである。

アメリカ軍全体におけるチャプレン制度の歴史的概観は、すでに拙論「アメリカ軍のなかの聖職者たち——従軍チャプレン小史——」²でおこなった。そこで本稿の目的は、アメリカ軍のなかでも特に「陸軍」に所属しているチャプレンの位置づけや任務内容などについて整理と分析をおこなうことである。アメリカ軍におけるチャプレン制度の特徴のひとつは、陸海空軍がそれぞれ別個に特殊兵科の一種としてチャプレン科 (Chaplain Corps) を有しているところにあるため、各軍それぞれにおけるチャプレン制度の内実は、厳密にはわけて整理をせねばならないからである。以下では陸軍省から出されている「野戦マニュアル」や「陸軍規則」といった内部資料、陸軍チャプレン訓練学校の生徒向けハンドブック、公式ウェブサイトなどの情報を中心に扱いつつながら、陸軍における従軍チャプレンの位置づけや任務内容、また宗教サポート活動の基本理念などについて総合的に分析していくことにしたい。

2、陸軍におけるチャプレンの位置づけ

第二次大戦時、アメリカ軍は合計約一二〇〇〇名のチャプレンを従軍させた。彼らのなかには空挺部隊とともにバ

ラシュートで敵地に降下したり、ノルマンディ上陸作戦に加わって銃弾が頭をかすめ至近距離で迫撃砲弾が炸裂するその場で、倒れた兵士のために最期の祈りをしてやる者もいた。また原子爆弾を広島や長崎に投下する際にも、従軍チャブレンは出撃前のB 29搭乗員らを前にして、任務の無事成功のための祈りをおこなったのである。戦闘機が発着する巨大な空母のなかにも小さな礼拝堂がつくられており、異なる教派の将兵が交代でそこを利用している。湾岸戦争ではアジア南西部に派遣された陸軍所属のチャブレンだけでも五六〇名にのぼり、今現在も世界中アメリカ兵のいるところにはほぼ必ずチャブレンがいる。彼らは大尉や少佐など軍の階級をもつ士官であり、他の将兵と全く同じ軍服を着用している。聖職者が迷彩服を着て銃を持った兵士らとともに礼拝をしている様子は、多くの日本人の目にはやや奇異な印象を与えるかもしれない。だが一七七五年から現在にいたるまで、アメリカ軍において従軍チャブレンは極めてメジャーな存在であり続けている。

従軍チャブレンという存在は、「陸軍規則一六五―一」³によれば、合衆国憲法修正第一条のいわゆる宗教的実践の自由を、軍隊内においても保障するためにおかれていることになっている。だが実際には一七世紀初頭にジェイムズタウンが設立されたばかりのころから、聖職者は民兵たちによる戦闘や訓練に付き添っていた。ピューリタンによる先住インディアンへの迫害や殺戮は宗教的側面から正当化されたが、アメリカにおける軍事と宗教の密接な関係は、単に戦闘員の内面的な思想や理念としてだけでなく、当初から従軍チャブレンという極めて具体的な形をとってあらわれてもいた。常備軍の一部として正式にチャブレン制度がおかれたのは一七七五年七月二九日の大陸議会の決定においてであり、よってこの日が「アメリカ軍チャブレン制度の誕生日」とされている⁴。植民地時代から南北戦争の頃までは、チャブレンも他の民兵たちと共に武器を持って戦うことが珍しくなかった⁵。部隊の先頭に立ち勇猛果敢な戦いぶり

を示して仲間の士気を盛り上げたとして、伝説的な存在になっていくチャブレンさえいる。だが一九世紀末には、従軍チャブレンは明確に「非戦闘員」と規定されるようになり、現在ではチャブレンによる武器の携帯・運搬・使用は完全に禁止されている。ジュネーブ条約においても、戦場で従軍チャブレンを捕虜にした場合は戦闘員とは異なる処遇をせねばならないことが明記されている。

ひとことに軍隊のなかで働くといっても、現在のアメリカ陸軍には、歩兵、工兵、戦車搭乗員、パイロット、エンジニア、歯科医、会計事務員など一五〇以上の職種がある。当然ながらその全員が前線での戦闘行為に参加するわけではない。これらの職種にはいくつかの分類方法があるが、さしあたりは大きく①戦闘(combat arms)、②戦闘支援(combat support)、③戦務支援(combat service support)、④特殊兵科(special branches)の四つに分けることができる。①は歩兵科、空挺部隊、航空隊、特殊部隊など直接的な戦闘を主とした職種であり、②には通信科、化学科、情報科、憲兵科などが当てはまる。そして③には輸送科、会計科、武器科、需品科などが該当し、④には衛生科、看護科、法務科などがあり、チャブレン科もこの④に該当する。従軍チャブレンが特殊兵科の一つであるといっても、彼らが軍の中核からやや離れた隅におかれているというわけではない。むしろ逆である。チャブレン科は陸軍の歴史において、歩兵科の次につくられた二番目に古い兵科なのである。彼らが独立宣言の一年以上前から公式に軍の一部として存在していたということは、アメリカという国家の指導者と民衆とがともに、軍事組織における宗教的任務を担う要員の重要性と必要性を認識していたからに他ならないであろう。

すでに述べたようにチャブレンは将校(士官)の身分であるが、戦闘の直接的な指揮をする戦列将校(line officer)ではなく参謀将校(staff officer)であり、指揮官に直属の専属参謀将校(personal staff officer)でもあるとされて

いる。軍で将兵らは通常それぞれの階級で名を呼ばれるが、しかし従軍チャブレンの場合は、彼／彼女が大尉や少佐などであったとしても、通常は単に「チャブレン」と呼ばれる。本来軍隊において士官と下士官の差異は決定的なものであり、両者間の個人的な交流も禁じられているが、従軍チャブレンが階級ではなくあくまで「チャブレン」と呼ばれることは、彼らの任務や位置づけが士官、下士官、兵の垣根を超えた特殊なものであることを示している。

陸軍省から刊行されている「野戦マニュアル」には、「チャブレンたちは宗教上のリーダーでかつ参謀将校でもあるという二重の役割を担う」と書かれている。彼らは宗教上のさまざまなニーズにこたえるのももちろんだが、同時に、担当する部隊の兵士の士気を維持する役割や、兵士たちの道徳面に關しても監督者的な役割を担う。すなわち、宗教・士気・道徳という三つの領域を総合的にカバーすることがチャブレンには求められているのである。具体的には主に礼拝、聖餐式、洗礼、葬儀、結婚式などの儀式、各種記念行事、そして将兵ひとりひとりへのカウセンリングなどが重要な仕事となる。だがさらには、所属する部隊の軍事行動が現地の宗教文化に与える様々な影響を事前に予測し、指揮官に報告やアドバイスを行うこともチャブレンの任務とされている。したがって陸軍チャブレンには派遣される地域の宗教文化をあらかじめ勉強しておくことが求められる。以上のような点を総合して、軍では「宗教サポート」という概念が用いられているのである。

従軍チャブレンがおこなう宗教サポートは、当然軍の内部でおこなわれるものだが、この場合の「軍の内部」には軍人の家族たちも含まれる。長期間戦地へ行って離ればなれになっている将兵の家族らに対する宗教面や精神面でのケアも、チャブレンが担当することになっているのである。また国防関連の仕事に従事しているシベリアン、さらには難民や敵の捕虜も同等のレベルで軍の「宗教サポート」の対象とされている。将兵やその他関連する人々に自由な

宗教的实践を保証する際の最終的な責任は、それぞれの部隊や基地の指揮官にあるとされ、「陸軍規則六〇〇—二〇」⁹において各指揮官は軍事作戦のあらゆる局面で幅広い宗教サポート活動の便宜をはかる義務があると規定されている。その具体的実践の中心がチャプレンなのである。

一八世紀や一九世紀の陸軍チャプレンは、宗教的役割だけでなく、兵士たちの識字教育や地理・歴史・倫理学などの教員もつとめた。また兵士たちの郵便物や現金の管理などをすることもあった。さらに、戦力の低下につながる性病の蔓延を防ぐため、ときには性教育をおこなうこともあったという。現在のアメリカ軍ではチャプレンは宗教上の仕事だけに集中せねばならないことになっているが、それでもそれぞれの時代状況において新たに必要とされる仕事が生まれたようである。例えばベトナム戦争中は軍隊内の薬物蔓延が問題になったため、それに対応するための専門プログラムも組まれた。また七〇年代には良心的兵役拒否者の真意を見定める役割にも従軍チャプレンがかかわり、最近では将兵の国際結婚に関するアドバイスやカウンセリング、また戦時に長期間家族と離ればなれになった兵士が任務を終えて久々に家族と再会してから、すみやかに元のような妻や夫あるいは子供たちとの関係を再構築できるよう支援する特別のプログラムも用意されている。

ところで現在の陸軍における宗教サポートの実践は、従軍チャプレンのみによっておこなわれるのではない。陸軍では一九〇九年から、従軍チャプレンを補佐する「チャプレンアシスタント」という要員がおかれるようになった。チャプレンアシスタントがチャプレンと異なるのは、アシスタントは聖職者ではないという点と、下士官であるという点、そして武器を携帯する戦闘員だという点の三つである。彼らはチャプレンの宗教サポート活動の助手をつとめ、また戦場でチャプレンたちの安全を確保する役割も担う。単なる宗教サポート活動の雑用係ではなく、兵士たちの戦

闘ストレスや自殺願望に対するカウンセリングから、戦術・兵站に関する準備や対策まで、専門的な知識と技能を身につける所定の訓練を受けた後に任命されるのである。チャブレンは実質的には軍のなかの階級を越えた特別な存在ではあるが、しかしそれでも形式上はあくまで士官であるため、下士官や兵たちは必ずしも個人的な悩みや相談事をすべて彼らに打ち明けられないという傾向もあるらしい。というのは、相談内容がチャブレンから上官に報告されて、自分の勤務評価の低下や昇進の妨げを招くのではと危惧する者もいるからである。そこでチャブレンと他の兵士らをつなぐ橋渡しとして、下士官であるチャブレンアシスタントが機能するのである。ちなみにドイツ軍などの場合は、従軍チャブレンは便宜的に迷彩服などを着用しはするものの、軍の階級を持たない。そのため下士官や兵らは、「上官」である精神科医よりもチャブレンの方に悩みの相談をしやすい環境になっているともいわれている¹⁰。

アメリカ陸軍ではこのチャブレンとチャブレンアシスタントを最低一名ずつ組み合わせたものをUMT (Unit Ministry Team) と呼び、すべての宗教サポート活動はUMTをひとつの単位として計画・実践されている。「野戦マニュアル」には、「UMTは、ショックと疲労と孤独、そして怖れと死のただなかにいる兵士たちに、希望、信仰、勇氣、あわれみを与えるものである。軍事作戦の不確実なカオスにおいて、UMTは神の顕現を想起させる者たちなのである¹¹」とも書かれており、宗教儀礼やカウンセリングをとおして将兵の精神面を全面的にサポートするのが彼らの使命であることが宣言されている。また彼らの宗教サポート活動は、部隊サポート、地域サポート、教派サポート、という三つの局面があるとされている。部隊サポートというのは、UMTが配属されているその部隊の内部における活動であり、これが任務の基本となる。地域サポートは部隊が作戦を展開している地域にいる将兵やシビリアンを包括的に対象とする宗教サポート活動である。三つ目の教派サポートは、宗教や教派ごとに分けた活動の方法であり、チャ

ブレン自身が属している教派の信者である将兵を対象とする礼拝や儀式をさす。チャブレンは基本的にはエキユメニカルな対応をすることが基本であるが、形式的にはこのように環境やそれぞれの状況に合わせて、チャブレンたちの活動には異なるレベルが想定されているのである。しかし従軍チャブレンの仕事が一般の聖職者のそれと最も大きく異なるのは、やはり特定の宗教に限定されない幅広い宗教上のサポートが求められるという点にある。陸軍公式ウェブサイトに、チャブレンであるために必要とされる条件のひとつとして、宗教的多元主義の状況に適応し、様々な信仰をもつ軍の各要員に公平に気を配ることのできる人物であることが挙げられている。

チャブレンの総数は戦時か平時かといった状況によって頻繁に大きく変化するため、現時点でどれだけのチャブレンが陸軍で活動しているかについての数字を出すことは必ずしも容易ではない。だが一九九八年にドイツ軍社会学研究所から刊行された資料『軍隊のなかの宗教——従軍チャブレンの国際的比較——』¹²によれば、その資料作成時点でのアメリカ陸軍チャブレン数は、現役任務についている者が約一四六〇名、予備役と州軍にいるものが約一五〇〇名と記されているため、¹³現在においても差し当たりはこの数字を参考に推測してよいであろう。ちなみに海軍、海兵隊、沿岸警備隊で現役任務についているチャブレンは合計約一一〇〇名、空軍での現役任務のチャブレンは約九〇〇名、民間空中哨戒部隊 (Civil Air Patrol) と空軍予備役には四五〇名のチャブレンが控えている。

3、宗教サポート活動の理念

陸軍のウェブサイトにおける陸軍チャブレン科の紹介は、次のような一文からはじめられている。「ある者は神に仕

え、またある者は国に仕える。その両方に仕える者、それが陸軍チャブレンである¹⁴。これはアメリカ軍におけるチャブレンの位置づけや理解を最も端的に表しているといえる。

チャブレンの聖職者としての権威は、軍からではなくあくまでそのチャブレンが属している宗教団体に由来する。だがチャブレンとチャブレンアシスタントには、軍人としての高潔な人格も期待され、「野戦マニュアル」には「陸軍チャブレンの真義」として次の六点が挙げられている。それは、「全ての宗教の基盤であり生に意味と方向性を与える」ところの「Spirituality」、「教えをいかに実践するかについて判断する」ところの「Accountability」、「表層の背後を見てわれわれに共通の人間性を見極める」ところの「Compassions」、「リーダーシップの役割を預言者的に解釈」したものである。この「Religious leadership」、「軍務と宗教的責任の基礎」としての「Excellence」、「自分自身のものとは異なる見方や考え方を尊重する」ところの「Diversity」、である¹⁵。だがこれらの六点はあまりに抽象的であって、理解しにくい部分もある。個々の理念についての詳しい解説はこれ以上は全くなされていないのである。ところが実は、これらそれぞれの頭文字をとると「SACRED」となるわけである。軍ではしばしば、長い言葉になってしまふ専門用語を各単語の頭文字からつくった略語にして用いることがあり、これもそのひとつなのである。しかしそれにしても「SACRED」とはあまりに出来すぎという感じがしないでもないが、軍としてはとにかくこうしたわかりやすい略語をつくってチャブレンのあり方を示してみせること自体に意味があるとしているのかもしれない。こうした部分からも、軍がチャブレンに望んでいるものや、あるいはチャブレン自身もっている自覚というものを推察することができるであろう。従軍チャブレンという存在の特殊性は、聖職者でありながら同時に軍人でもあるという点にあるわけだが、彼らは自らを「司令の良心」(conscience of the command)とも称している¹⁶。また「野戦マニュアル」第一章には「U

MTは陸軍的価値観をうつす鏡であらねばならない」とも書かれており、彼らはそのような自覚をもって信仰の問題、軍事作戦の倫理的問題、兵士たちのQOLの問題などに幅広く取り組むように教育されるのである。

チャブレンの徽章には、ラテン十字、モーセの石板とダビデの星、三日月、法輪の四種類のものが用意されている。つまりキリスト教、ユダヤ教、イスラム教、仏教の四つであり、キリスト教徒が圧倒的多数を占めるアメリカ軍においても、チャブレンはキリスト教に限定されてはいない。¹⁷「野戦マニュアル」には、陸軍チャブレン科のモットーとして、「兵士に神を、神に兵士を」(Bring God to Soldiers, and Soldiers to God)という言葉が挙げられている。¹⁸そこには、これはあくまで「非公式」なモットーである、とただし書きが添えられているが、一応これも陸軍チャブレンの位置づけを表現したものだといえるだろう。また全軍のチャブレン科のモットーは「PRO DEO ET PATRIA」すなわち「神と祖国とのために」である。「兵士に神を、神に兵士を」にしても、またこの「神と祖国とのために」にしても、「神」という言葉が用いられてはいるが、これらはアメリカの通貨にも書かれている「IN GOD WE TRUST」などと同じように、特定の宗教に限定されない市民宗教的な表現として捉えられているのであろう。しかし陸軍チャブレン学校のモットーは、「神を畏れることは知恵の初め」(旧約聖書「詩篇」一一一章一〇節)であり、また紋章にもオリブの枝をくわえた鳩が描かれている。つまり実際には、やはり暗黙の前提としてキリスト教やユダヤ教が念頭におかれる傾向が強いことは否定できない。だが一九八四年に制定されたチャブレンアシスタントの徽章デザインは、左右の手のひらが扉の開かれている建物を下から支えている様子をシンブルな線で図案化したようなデザインになっており、これは特定の宗教を連想させないよう配慮したものではないかと思われる。

ところでチャブレンとチャブレンアシスタントになるためには、所定の訓練をへてその資格を得る必要がある。そ

のための一連の教育や研究をおこなっているのが、現在はサウスカロライナのフォートジャクソンにある「合衆国陸軍チャブレンセンター&スクール」である。初めて陸軍チャブレン学校がつくられたのは一九一八年である。それは当時のチャブレン、アルドレッド・A・ブルーデン少佐によって計画され、ヴァージニアのフォートモンローにつくられた。ブルーデンは今も「陸軍チャブレン学校の父」と言われている。以後それはアメリカ各地への移転を繰り返して、最終的にはこのフォートジャクソンにおちついた。現在ここには「陸軍チャブレン博物館」も併置されている。この「合衆国陸軍チャブレンセンター&スクール」はもちろんアメリカ陸軍のチャブレン養成を目的とした施設であるが、外国（同盟国）の軍隊のチャブレンの訓練を受け入れる体制も整えている。この学校でおこなわれる訓練で中心となるのは、チャブレン士官基礎コース（Chaplain Officer Basic Course）という課程で、これは従軍チャブレンとしての仕事を九〇日間で学ぶコースである。それぞれの教派や宗教団体からすでに聖職者としての資格を得ているものがこれに参加し、このコースを修了したら、大隊レベルの部隊に現役任務のチャブレンとして配属されるか、あるいは予備役や州軍のチャブレンになる。基本的には大学院修士以上の学位が求められるが、それ以前にアメリカ国籍もしくは永住権をもっていることが必要であり、事前に身元調査、身体検査などもおこなわれる。チャブレンアシスタントには、一分間に二〇ワード以上のタイプライティングが出来ることや、任務に必要な車両運転免許、武器を持ち使用する意志があることなどが条件となっている。

チャブレン士官基礎コースは大きく四つのパートに分けて進められる。まず最初の四週間で、戦闘スキルを除く陸軍の一般的な知識や技術を習得する。具体的には陸軍の慣習や儀礼、地図の読み方、各種作戦に関する知識、サバイバルの方法などである。次の二週間は軍での書類作成や通信の方法を学ぶ。そして次の三週間と最後の三週間とで、

陸軍チャブレンとしての特殊不知識や実践のための訓練が行われる。一方チャブレンアシスタントは、七週間の集中訓練によって陸軍における宗教活動をサポートする方法や、兵士らが個人的な困難をうったえてきた際の対応などについて学ぶ。彼らは事前に「戦闘基礎訓練」を修了している必要があるが、それは彼らが武器を携帯してチャブレンの安全を確保することに責任を負わねばならないからである。

チャブレン士官基礎コースに入る時点で、彼らはすでに髪を短く切りそろえ、女性も前髪は眉毛より長くはならず後髪も襟に触れない長さにせねばならない。ヘルメットをかぶる際にじやまになってはいけないうし、防毒マスクの着用訓練なども行われるからである。服装も基本的には軍の戦闘服 (Battle Dress Uniform) にコンバットブーツであり、この時点で身なりや所作は聖職者というよりは軍人そのものとなる。訓練期間中はアルコールとタバコも禁止され、彼らの一日は朝五時三〇分から六時三〇分までの体力訓練が始まる。その後には朝食、礼拝などがつづき、夕方五時三〇分までさまざまなプログラムによる教育を受ける。全ての教科で七〇%以上の点をとらねばならず、それ以下の場合には再試験等が課せられる。¹⁹一連の訓練コースを無事に修了すると正式に陸軍チャブレンとなつて、現役任務の場合、最初はまず三年間の任務につく。予備役の場合は一ヶ月に一度の週末、および二年間に二週間の任務である。給与は他の士官と同様であり、年に三〇日の休暇、無料の宿舎、低掛金による二五万ドルまでの生命保険、基地内のスポーツ施設利用の権利などが付随する。こうしてこの九〇日間、彼らは宗教上のリーダーであると同時にアメリカ軍将校でもあるという二重のアイデンティティを獲得するのである。

ところでチャブレンらUMTの活動内容は、それぞれの置かれている状況や環境によって異なつたものになる。軍事組織は一般にそれぞれの政治的・戦術的状況によって規模や配置を頻繁に変化させるが、軍の中の宗教サポート活

動も当然個々の状況に応じた適切な形をとらねばならない。冷戦の時代とソ連崩壊後では軍のあり方そのものが変化した。特に二一世紀に入ってから、9・11テロやイラク戦争の経験によりアメリカ軍全体の行動や意識はさらに大きい変更をせまられた。チャブレン向けに書かれた「野戦マニュアル」の第二章では、国内外での大量破壊兵器によるテロ行為や、サイバーテロ攻撃による情報インフラに対する脅威についても言及されている。²⁰これらはひとつ古い九五年版の「野戦マニュアル」(FM16-1)には無い記述であり、〇三年の改訂版「野戦マニュアル」(FM11-05)の際に新たに書き加えられたものである。そこでは次のようにも述べられている。「脅威を測定可能・予測可能であった冷戦時代とは異なり、今日の軍隊は極めて曖昧で不確かな状況に直面する傾向にある。合衆国陸軍は世界規模の戦略・作戦・戦術による挑戦に対し、一国の軍として、あるいは統合軍もしくは多国籍軍の一部として、それに備えねばならない。合衆国陸軍のUMTもまた、どんな偶発事象や状況の中でも宗教サポートを提供する準備をしておかねばならない」²¹。

ひとことに軍事行動と言っても、それはいくつかの局面に分けて考えねばならない。軍隊がおかれるのは、極めて激しい戦闘状況の場合もあれば、外交的・政治的な戦略の方が重要な意味を持つ安定した状況もあり、また災害援助や治安維持などの戦争以外の状況もある。それぞれにおいてUMTの宗教サポートも適切な仕方です計画・遂行される必要がある。だが「野戦マニュアル」によれば、二一世紀の軍事の特徴は、さらにそうした軍事行動の諸相が、これまでよりもめまぐるしく変化する点にあるという。例えば、激しい紛争状態から短期間のうちに戦略的な政治的・外交的局面が重視される状況に移行し、やがて戦争状態を完全に脱することもあれば、またその逆もある。そしてさらに、狭い地域の中でそれらの異なる諸相が同時に多発することもあり、良くも悪くも状況が不安定であることが多

いというのである。それが今日の軍隊をとりまく状況であり、紛争地域の最前線において営まれる宗教サポート活動においても、UMTはそれぞれの部隊がおかれている状況を冷静に踏まえた上で任務遂行にあたることが求められる。単に宗教的儀式の専門家であるだけではだめで、他の兵士たちと同様に、あるいはそれ以上に優れた状況判断力をもつてして、必要な任務を計画・遂行することが求められるのである。

「野戦マニュアル」は九五年版(FMI6-1)も〇三年版(FMI-05)も、ともに一章から三章までは基本的な原理原則が述べられ、四章以下で応用的な解説がなされるという構成になっている。九五年版「野戦マニュアル」(FMI6-1)の第四章以下では、攻撃作戦・防御作戦・平時の活動・戦争以外の諸活動、といった部隊の作戦の性質ごとに宗教サポート活動の内容がまとめられているのに対して、〇三年版「野戦マニュアル」(FMI-05)の第四章以下は、基本的には部隊規模ごとに活動内容の解説が整理されるようになった。この改訂は、湾岸戦争、9・11テロ、またアフガニスタン攻撃などの経験を踏まえて、急変しうる作戦の性質(内容)を基準にするよりも、部隊規模を基準に活動内容を解説した方が現実在即しているという判断がなされたからではないかと推測される。とはいえ、軍事作戦は、攻撃・防御・安定化・援助という四つの分野に分けられ、またそれぞれにおける宗教サポートは、平和的作戦におけるもの、統合作戦におけるもの、特殊作戦におけるもの、文民に対するもの、というこれもまた四つの側面に分けて整理がなされてもいる。具体的な宗教サポートの方法については各章の解説を今後さらに分析していく必要があるが、差し当たりは、マニュアル前半(一章～三章)の基本原則の記述においてすでに、新たな軍事的状況の変化がチャブレンの任務にも影響することが強調されていることを述べるにとどめておきたい。

4、陸軍のなかのチャブレンたち

以下では陸軍ウェブサイトの中に書かれている、実際のチャブレンたちの自己紹介欄や個人的な体験などに注目してみたい。²²そこでは一〇名のチャブレンについて、本人の顔写真付きで、プロフィールや自らの任務に対する考えなどが書かれており、また二名のチャブレンが自らの仕事について述べている一分程度の動画も掲載されている。ただし一〇名分の紹介記事は、部分的に彼ら自身の言葉が直接引用されているものの、基本的には三人称の文章で書かれている。また二名分の動画も映画やテレビ番組のように丁寧に編集されており、本人たちだけの手で製作されたとは考えにくい。すなわちこれらの記事はチャブレンたち自身が直接執筆や撮影をした純粋な投稿記事の類ではなく、おそらく陸軍の専門スタッフがインタビューなどをおして組織的に編集・製作したものであると思われる。つまりこれらは純粋な意味でのチャブレンの「声」ではない。だがそもそもこのウェブサイト自体は、軍が従軍チャブレンという職種の仕事内容、意義、やりがいなどを紹介し、よりよい人材を確保することを目的としてつくられているのである。一連の情報がチャブレンによる純粋な投稿記事ではなく、第三者の編集をへて掲載されている文章や映像だからこそ、かえってこれらは軍によって考えられているチャブレンの模範ないし理想像を述べているものとして扱うことができるのではないかと思われる。

まず一〇名のチャブレンのプロフィールや言葉を見ていくと、一連の記事から読み取れる要点は大きく三つあると考えられる。

まず一つは、「愛国心」と「信仰心」の二つが、いずれのチャブレンにおいても自分たちの使命感を支える重要な柱となつていとされている点である。愛国心という要素はアメリカ国内で生まれ育つたチャブレンにおいてはもちろんだが、そうでない場合にも大変強く意識されている。例えばアン・タン中尉（メソヂイスト）は香港出身の女性チャブレンで、ほんの数年前にアメリカ国籍を取得したばかりだという。彼女にとつて従軍チャブレンとして働くことは、アメリカという新しい祖国に対して自分出来る貢献のひとつなのだという。タンは次のように述べている。「従軍チャブレンであることは神の思し召しです。これになるといふ決断は簡単なものではないかもしれませんが、しかし私の場合はこう考えました。すなわち、もし祖国を持たないならば、つまりは帰る家を持たないことなのだ、と」。

ジェローム・リステッキイ中佐（ローマ・カトリック）が陸軍第三三〇医療旅団のチャブレンとして働く理由も、愛国心ぬきには語れない。彼は従軍チャブレンであると同時にシカゴの補佐司教でもある。彼は次のように言う。「陸軍予備役のチャブレンでいるということは、私の愛国心と祖国への恩返しのひとつのあらわれです」。リステッキイは七〇年代後半にローマで勉強をしていたのだが、そのときに陸軍にはカトリックのチャブレンが不足しているという話を聞いてチャブレンになる決意をし、それ以来二〇年以上にわたつて兵士たちに神の言葉を伝えていくという。聖職者である以上、確固とした信仰が従軍チャブレンであるための最も重要な条件であることはいうまでもないが、強い愛国心も不可欠な要素となる。これは軍の将校である以上は当然といえれば当然のことであるが、それはチャブレンというやや特殊な立場の軍人においても全く同様なのである。

従軍チャブレンに共通する認識の二点目は、チャブレン訓練学校で経験する他教派の聖職者たちとの出会いの素晴らしさである。アイザック・オパラ中尉（ローマ・カトリック）は、かつてフォートジャクソンにある陸軍チャブレン

ン学校で「チャブレン士官基礎コース」を受け始めたとき、チャブレンの役割を、超教派的なものとして教えられたことに驚くと同時に、それに大いに感心したという。彼はそれを次のように述べている。「あなたたちがここ（陸軍チャブレン学校）に来てチャブレン士官基礎コースを受け、いろいろな教派のチャブレンが仲良くやって互いを尊重しているのを見ると、天国とはこんな感じかと思うことでしよう」。エキュメニカルな運動は現代の宗教的状況を代表するもののひとつだが、軍隊では現実的な要請から、一般社会よりもずっと早くから教派の違いをこえた宗教的実践がなされていたのである。よってアメリカ軍チャブレン制度は、現代における宗教間対話などとの問題連関からも注目されてよい事例だと思われる。

チャブレンの自己認識に関する三つ目の共通点は、従軍チャブレンという特殊な仕事が他の一般の聖職者の仕事とは異なることに由来する充実感である。彼らによれば、従軍チャブレンという身分は、一般の教会の聖職者にくらべて、より多様な人々と出会うことができるという。一般の教会には総じて同じような価値観の信者が集まりやすいものだが、軍隊では様々な出身、人種、価値観や信仰心の人間が集まり、多様性を極めていいる。先に二つ目のポイントとして従軍チャブレン同士の超教派的な交流を挙げたが、彼らが相手にする兵士やその家族たちの多様性という点は、聖職者としての仕事の難しさであると同時に大きなやりがいであり喜びにつうじるものだというのである。自分の担当する部隊や基地の将兵たちを「家族のようなもの」と表現するチャブレンも多い。チャブレンのチャールズ・ウッド大尉（バプテスト）の妻デボラは夫と共にフォートベニングで働き、軍のプロテスタント婦人会の副会長をしながら様々な集会や聖書研究会のコーディネーターもしている。彼女は、「軍の一員であるということは家族であるようなものです。私は外の社会にいたときには経験したことのないコミュニティの感覚というものをもっています」と述べて

いる。最近までアフガニスタンの野戦病院でチャブレンとして任務に就いていたり・ヨークム少佐（ローマ・カトリック）も、戦闘地域で活動することの困難と厳しさについて述べつつも、だからこそ将兵たちと「家族のように」仲良くなれるのだという。

マーク・ゴートティアは、歩兵部隊の将校として陸軍に入隊したが、「ラディカルな宗教体験」をへてチャブレンになる道を選んだ。アフリカ、タイ、イラク、パナマなど、これまでの一四年間の従軍チャブレン生活では世界のさまざまな場所で任務に就いた。セレスティン・ロブ大尉もドイツ、ハワイ、イタリア、韓国などさまざまな場所でチャブレンとして働く経験ができたことを喜んでいる。陸軍はこのウェブサイトをとおして、チャブレンになればアメリカ国内だけでなく、海外に赴任するチャンスも多いということをアピールしているようにもみえる。

チャールズ・ヨスト少佐は第三三情報大隊に従軍チャブレンとして所属し、「イラクの自由作戦」に参加した。彼はそこで基地のテントからテントへと渡り歩いて兵士らの声に耳を傾け、食事も毎回違う人々とともに食べるようにしたという。毎日開かれる聖書勉強会には常に三〇人近くの将兵らが参加したと述べている。チャブレンアシスタントとしてヨスト少佐とUMTを組んだのがステイヴィー・ミック軍曹である。彼はもともとチャブレンで、後にチャブレンアシスタントになったという珍しい経歴の持ち主だが、チャブレンアシスタントは士官ではなく下士官であるため、チャブレンよりも兵士らと親密になりやすいポジションであり大きなやりがいを感じているという。彼らはイラクでは味方の将兵たちだけでなくイラクの一般市民とも多く関わり、地元の子供たちのために学校用品を輸送する任務にもついていた。子供たちが話しかけてくるアラビア語はわからなかったが、彼らの笑顔には自分たちを怖がったりせずむしろ幸せと感謝の気持ちがあったとも述べている。ミック軍曹によれば、チャブレンという仕事で重要なのは、

将兵たちのいる「その場にいること」であるという。兵士たちはチャブレンの襟元にある十字架の徽章を見ることにより、それだけである種の安心感を得るのであり、ミック軍曹は、チャブレン・ヨストはそのことをきちんと理解しているとして彼を高く評価している。

チャブレン・ステイブレン・バログ大尉は、「砂漠の風作戦」の際に歩兵部隊、戦車部隊、ヘリコプター部隊など行動をとみにした。ある夜、彼は騎兵大隊とユーフラテス川方面に向かったのだが、途中で通過する場所はそれまでの八時間あまりの間に五回の戦闘がおこなわれた危険な区域であった。バログはそのとき運転手兼無線オペレータをつとめ、UMTを組んでいたチャブレンアシスタントのサンティアゴ・イリアート軍曹も後ろの席に乗り、M16ライフルをかまえて周囲に目を光らせ、緊張した時間を過ごした。その時の経験をとおして、バログは神にすべてをゆだねるということの意味と、チャブレンの活動の真の意義を経験することができたと述べている。バログもまたミックやヨストと同様に、従軍チャブレンの仕事で重要なのは、「その場にいること」、すなわち、危険な戦闘のただなかにおいても兵士たちに勇気を与え祈りのサポートを提供することに他ならないという。

バログらはクウェートからイラクへの国境を越えるとき、その師団のすべての車両に聖水をかけて祝福をした。そのおかげで、タルマッジ・ベネット一等軍曹は第三歩兵師団とともにバクダッドに入る際、「われわれは神の恩寵によつて救われた」と回想している。自分が乗っていた車両のわずかに二フィート脇に迫撃砲弾が落ちて危うく難を逃れたこともあったし、顔の真横をかすめるようにRPG（対戦車ロケット弾）が飛んでいったこともあったという。こうしたぎりぎりのところを死なずにすんだという経験は他の兵士にもある話だといひ、彼は「チャッピー」(チャブレンの愛称)はわれわれを神のそばにいさせてくれる人なんだ」と述べている。こうしたものは宗教的態度としては極めて

素朴なものにも見えるが、銃弾が飛び交い至近距離で砲弾が炸裂する実際の戦場においては、結局そうしたなかで勇気と安心感を与えられるかどうかはそのチャブレンの全力量がかかっているのであろう。

ポール・メデジ少佐は、第一〇一空挺師団に所属するローマ・カトリックのチャブレンとして「不朽の自由作戦」や「イラクの自由作戦」に参加した。イラクへの国境をまたぐ直前におこなったミサには数百人の将兵が集まったという。メデジによれば、イラクでの任務においてまず重要だと思われたのは、イスラム教とキリスト教の関係をどう扱うかであった。そこでまず最初に他のチャブレンたちともに行ったのは、大将から二等兵にいたるまで、全ての将兵に対してイスラム教とは何かについて説明会を開くことであった。メデジは感謝祭の数日前にハトラという町で、その町のイマームとともに、ラマダンの終わりとクリスマスが近づいたことをよろこぶための合同の祝いの会をもった。異なる信仰にもかかわらず、それぞれの聖職者がともに聖なる季節を祝い、町や軍の指導者もまじえて、アメリカ軍とイラク国民の両方のために祈ったのだという。

ここで紹介されているチャブレンの経歴は実に多様であり、人種も白人、黒人、アジア系といろいろで、また一〇人中四人が女性チャブレンとなっている。普通の聖職者から軍の訓練課程をへて従軍チャブレンになった者もいれば、モリス信号解説オペレータからチャブレンに転身した者もある。また歩兵として陸軍に入隊してやがてレンジャー部隊の教官にまでなっているながら、突如「啓示」を受けてチャブレンになることを決意したという者もある。先にあげたチャブレン・ゴージェアも、二年間レンジャー連隊のなかで任務についたことは自分の誇りでもあると述べている。第二次大戦では、空挺部隊と共にパラシュートをつけて敵地に降下するチャブレンもいたことを考えれば、戦闘員の経験をへてチャブレンになったという経歴の者がいても全くおかしくない。一九四〇年代の戦場におけるアメリカ

カ軍チャプレンの死亡率は、歩兵部隊と航空隊に次ぐ三番目だったともいわれている。前線に配置されるチャプレンは、ひ弱なインテリではなく肉体的にも精神的にも強くなければならないが、予備役のチャプレンとして一般社会での生活と両立させている聖職者もいる。人種も性別も、そして教派もさまざまであるが、そうしたチャプレンたちの多様性は、アメリカ軍の構成員そのものの多様性を反映しているともいえるであろう。

5、むすび

「宗教」と「軍事」は、良くも悪くも人間社会に共通の営みである。「宗教」は人間個人の生と死や、社会秩序そのものにも関わる信仰や思想、儀礼や慣習であり、「文化」のひとつである。「軍事」も人間の生と死に深く関わり、社会のありようから影響を受けまた影響を与える。そしてそこでは徹底的な合理性が追求されると同時に、独特の伝統や倫理や美学が重視される。そうした意味では、「軍事」もまたひとつの「文化」であるとして冷静にそれと向き合うことも、真摯に「平和」について考えていくためには必要であろう。冒頭でも述べたように、筆者は、軍隊という組織のなかで営まれる伝統的宗教や、軍隊という組織そのものをもつ広義の宗教性、また戦場で人がどのように自らの信仰と向き合ったかという問題に関心をもっている。「宗教」と「軍事」との交錯部分には、人間や社会が普遍的にもっている何らかの性質や傾向、あるいは運命のようなものが垣間見え、また同時に、個々の国や社会の個別的な特徴が浮き彫りになっているようにも思われる。

本稿はそうした展望のもとで、差し当たりアメリカ陸軍チャプレン科の内実を概観することを目的としてきた。「宗

教と戦争」「宗教と平和」という問題を考えていく際の手がかりとして、また、アメリカという国家の文化や歴史を考察していく際の足がかりとして、従軍チャブレン制度は興味深い対象のひとつである。本稿ではもっぱら陸軍という組織の側から出されている内部の資料を中心に整理してきたが、従軍チャブレンそのものをより多面的に捉えるには、今後はチャブレン自身によって書かれた多くの手記や従軍体験記の類にも目を向け、兵士たちとの交流などに関する実際の側面にも注目することが求められるであろう。

- 1 古代から現代にいたるキリスト教の立場からの戦争論の紹介としては、Arthur F. Holmes ed., *War and Christian Ethics: Classic and Contemporary Readings on the Morality of War*, second edition, Baker Academic, 2005. などが便利である。
- 2 石川明人「アメリカ軍のなかの聖職者たち——従軍チャブレン小史——」(『文学研究科紀要』一一七号、北海道大学、二〇〇五年)
- 3 Army Regulation 165-1, Department of the Army.
- 4 海軍のチャブレン科は同一七五年一月二十八日、空軍のチャブレン科はずっと遅く、第二次大戦後の一九四九年五月一〇日に誕生した。空軍だけが遅いのは、アメリカ軍のなかに独立した軍としての空軍が組織されたのがそもそも一九四九年になってからのことだからである。第二次大戦で使用された航空機やパイロットは、陸軍航空隊あるいは海軍航空隊の所属である。
- 5 アメリカ軍チャブレン制度の成立と発展の歴史に関しては、石川明人前掲論文、三一—六六頁を参照。
- 6 cf. Keith E. Bohn, *Army Officer's Guide*, 49th Edition, Strackpole Books, 2002, p. 258. 次のような一〇種に分類されることもある。①管理とサポート、②メディア関連、③戦闘、④コンピュータ関連技術、⑤建設と工事、⑥情報と戦闘支援、⑦法律関連、⑧機械技術、⑨医療と衛生、⑩輸送と航空。この場合、チャブレン科は①に該当する。
- 7 Field Manual: 1-05, Religious Support, Department of the Army, 2003, chapter 1, p. 7.
- 8 *ibid.*, Appendix F: Guide for Religious Area/Impact Assessment.
- 9 Army Regulation 600-20, Department of the Army.

- 10 ヘルリンの「ドイツ軍カトリック従軍司祭会館」で関係資料の管理をしているモニカ・ジューダーホフ氏とのインタビューによる。
- 11 Field Manual: 1-05, Religious Support, chapter 1, p. 9.
- 12 Martin Bock, *Religion within the Armed Forces: Military Chaplaincy in an International Comparison*, (FORUM International, Vol. 20), Sozialwissenschaftliches Institut der Bundeswehr, 1998.
- 13 *ibid.*, p. 201.
- 14 <http://www.goarmy.com/chaplain/index/jsp> (二〇〇四年一〇月現在)
- 15 Field Manual 1-05, Religious Support, chapter 1, p. 11.
- 16 *ibid.*, chapter 3, p. 25.
- 17 アメリカ軍のチャプレン科においてユダヤ教、イスラム教、仏教の聖職者がいっただのように採用されていたかについては、石川明人前掲論文を参照。
- 18 Field Manual: 1-05, Religious Support, chapter 1, p. 10.
- 19 Chaplain Personnel Management, (Department of the Army Pamphlet 165-17), 1998, p. 7.
- 20 Field Manual: 1-05, Religious Support, chapter 2, p. 2.
- 21 *ibid.*, chapter 2, p. 6.
- 22 <http://www.goarmy.com/JobDetail.do?id=317> (二〇〇七年一〇月現在)

本稿は平成一九年度文部科学省科学研究費補助金(課題番号一八七二〇〇一六)による研究成果の一部である。